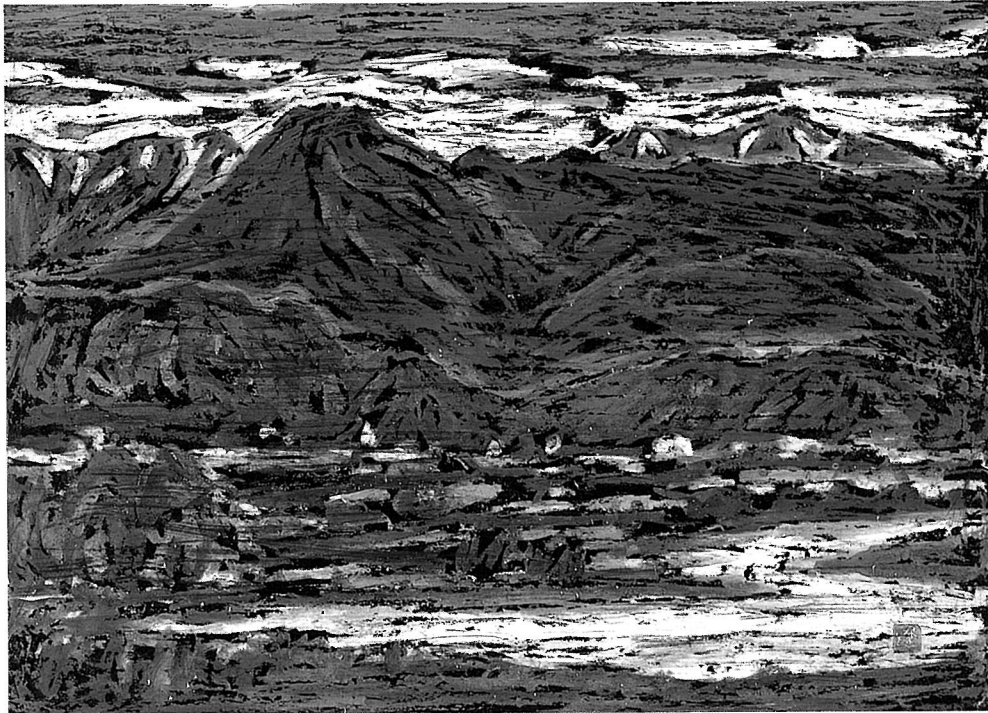


日本産業衛生学会東海地方会

地方会ニュース

発行所 日本産業衛生学会東海地方会
〒470-11
愛知県豊明市沓掛町田楽ヶ窪1-98
藤田保健衛生大学医学部公衆衛生学教
室内 電話(0562)93-2453
発行責任者 島 正吾



信濃富士の黎明 (高山今朝文 豊田健康管理クリニック)

この絵の技法は氏のオリジナルで、クレヨン、水彩、墨汁、削出し小刀を使った“クレヨン版画”とも云おうか。

東海地方会に帰ってきて

館 正 知 (岐阜大学名誉教授)



8年ぶりに東海地方会に帰ってきました。早速浜松での地方会で産業医の専門性についての意見を求められましたが、その会場では3分の2は識らない人でした。

東海地方会が今どうなっているのか知らないのは当然のことだと思いました。

東京に出て、情報の多いことと、その伝播の速いことを身をもって知りました。情報の量や耳に入ることの速さがそんなに重要なことかと、岐阜のお弟子さんにひらきなおられたことがありました。私は重要なことだと思います。実験室で世間とは無関係に仕事をしている人は別として、われわれのような云はば実学の世界で仕事をしているものは世の中の動きに対して自分の意見を持ち、態度を決めなければなりません。それには官・学・労からの情報が極めて大切なエサとなるからであります。東海地方会は情報の収集にもっと力を入れなければならないように思います。

われわれの分野のオピニオン・リーダーやデジジョン・メーカー

が東京に偏って多いのはくやしいことですが事実です。しかし東海地方会がかつてその役割りを果していたことがあるように思います。産業医活動が活発で、かつそれぞれ独自の境地をきり拓いて「光は東海から…」などと豪語していたことがあります。産業医協議会の誕生をうながしたのは東海地方会でありました。各種の研究活動も他の地方会とは比較にならぬ程活発でした。東海地方の大学が物質を分担して情報を集め、それぞれの許容濃度を提案したこともありました。井上俊教授の「日本人労働者の血液正常値」には東海地方の産業医が率先してデータを提供し、協力したと聞いております。

たしかにわれわれをとりまく状況は、むかしと今とはかなり異なっています。それにしても、地理的にも人数の上でもまとまり易い大きさの東海地方会が、ちえと力を出し合ってオピニオン・リーダーあるいはデジジョン・メーカーの役割りを果すことができそうに思うのですが如何なものでしょうか。

特集

日本産業衛生学会第33回産業精神衛生研究会 東海地方会第38回職場精神衛生研究会

今回のメインテーマは、「職場適応を考える」である。平成3年10月30日（水）午後、名古屋市中小企業振興会館（吹上ホール）7階ホールにおいて開催された。今回は上記両研究会の合同開催で、地元東海を中心に、全国から計約200名の熱心な参加があり、この問題に対する関心の高さが窺われた。以下、当日の概要を鈴木良一先生にまとめていただいたので特集記事として掲載する。ご一読たまわりたい。なお西原先生より当日の抄録が届いたので参考にさせていただいた。併せて謝意を表す。（編集部）

本研究会を聴いて

鈴木良一（関西電力大飯発電所）

プログラム

シンポジウム「職場適応を考える」

司会 坂本 弘（三重大学医学部衛生学教授）

1 主題解説

2 人間関係および社会文化的環境と適応

池田 正雄（職域メンタルヘルス研究所長）

3 物理化学的環境と適応

小峰 弘久（日本産業安全衛生研究所長）

4 作業と適応

入谷 辰男（トヨタ自動車産業医）

5 職場適応と管理監督者のサポート

橋本 哲明（東芝三重健康管理室長）

6 職場適応と家族のサポート

森谷 寛之（愛知医大心理学科助教授）

7 討論とまとめ

研究会は三菱電機森川利彦先生の総合司会で進められた。

最初に3名の先生からの挨拶がなされた。まず、東海地方会会長島正吾先生から東海地方会の精神衛生への取り組みについて、毎回時宜にかなったテーマを勉強してきた歴史を紹介されたのち、本日の研究会が Negative Mental Health から Positive Mental Health への転換期を示すものであるとしてその意義を強調された。

次に、本部の産業精神衛生研究会会長西原哲三先生から昭和44年からの本研究会の経過についての説明があり、今回の開催に当たり地元関係者に感謝の意が表明された。

最後に愛知医大大学長祖父江逸郎先生は、東海地方会職場精神衛生研究会会長として、健康の身体的、精神的、社会的の3側面のうち、今後、21世紀の高齢化社会を迎えて、精神的、社会的健康への比重が高まるであろうと挨拶された。

以上で挨拶は終わり続いてシンポジウムに入った。



1. 主題解説



ると説明された。

司会の坂本先生から、本日のテーマの解説がなされた。その主旨は精神衛生の問題を人間をとりまく外側条件（作業状態、物理化学的環境、人間関係など）と内界（身体、心、靈魂など）との相互作用と受け止め、両者のバランスを3管理との関係もふまえて考えていくことにあると説明された。

2. 人間関係および社会文化的環境と適応



池田先生は、日本の現代は文明史的変動の時代であると論じられた。すなわち、わが国は敗戦によって社会制度の大変革を余儀なくされ、その結果、先進的な科学技術や効率的な経営管理の導入により、画期的な高度経済成長をとげた反面、理性的合理的な西欧文明と、わが国の伝統的な自然や人との調和を重んずる情緒的な社会風土との間にある種の混乱が生じ、価値観の多様化現象を生ずるにいたった。したがって組織と個人の論理の不調和、科学技術と人間性との問題、営利と自己実現との葛藤などをどのように統合していくかが問題となった。このような時代こそ所属集団への適応心理についての追求とともに、他方では集団に非依存的な「散」の自立精神醸成への人間学の必要性を強調された。

従来より指摘されながらもすれば軽視されがちであった一面に焦点を当てたアプローチが新鮮で印象的であった。

3. 物理化学的環境と適応



小峰先生は、物理化学的環境に焦点をしばって、それら外的環境に対する人間の適応問題を論じられた。人間の適応に影響する環境として、外的環境と内的環境とがある。外的環境には物理的、化学的、生物学的環境のほか、人がつくった社会環境もある。一方内的環境とは自分自身がつくり出す心身的環境であって、その中心は心がつくり出す自分自身の生きざまであることを説明された。外的環境のなかで力、騒音、振動、光線、温熱などの物理的環境および化学物質などの化学的環境に対しては、人間は非常にもろい存在であって適応することがたいへん困難である。そこでこれら外的環境に対する適応

の仕方について具体的に解説され、いかにも衛生工学関係の専門家らしい内容であった。

4. 作業と適応



入谷先生からは、最初に演題に対するトヨタ自動車の管理方法の説明がなされた。作業管理の面から適応を考える場合、作業に対するなんらかの評価尺度が必要になる。それには人間の運動、感覚、精神の3つの機能を産業加齢学のGULHEMPスケールにより分析し評価の上、作業条件管理を行い作業負担を軽減することなどによって、職業性疾病や疲労防止をはかり、快適な職場づくりならびに生産性向上に結びつけている。ついで健康管理のQ.C的進め方として健診や健康測定の結果を医療、生活、作業面の指導につなぐ手順が紹介された。最後に、精神衛生に対する組織活動のあり方について先生の考えを述べられた。それには労務対策、監督者教育と不適応対策が含まれるが、労務と教育はPositive Mental Healthの分野として教育担当が分担すべきものであり、産業医は不適応対策の如きNegative Mental Healthを担当すべきではないかの発言がなされたが、産業医は精神衛生の組織活動のコーディネーターであるとともに、健康管理部門あるいは産業医局は不適応者を受け止める第2次ケア部門としての機能のあり方からみて、まことに至当な意見と感じられた。

5. 職場適応と管理監督者のサポート



橋本先生は次のようにのべられた。労働者の心身の健康を高めるためには、労働者に対し仕事を適応させること、すなわち職場の人間化が必要であるが、それにはKey Personが必要である。ところがKey Personである管理監督者の目は、どうしてもPM理論の作業遂行能力に傾斜しがちで、その結果、部下の作業能保持能力への働きかけが不足することとなる。この要因は労務管理の欠陥とともに、管理技法教育の不足していることにあるといえる。そこで職場の精神保健をすすめるためには第一に企業のトップの姿勢が確立されていること、ついで援助とその組織体制をつくることの2つが必要となる。以上が橋本先生の発言の骨子である。

ついで、東芝の精神保健の歩みと三重工場における現在までの取り組みの紹介がなされた。すなわち、最初は職場不適応事例の援助活動から始まり、昭和46年嘱託精神科医を招聘、ついで昭和52年より精神保健活動のライン化のためのラインリスナー教育を開始、幹部教育、ついで部課長教育、現在は主任製造長教育と管理監督者に対する教育を行っているとの経験がのべられた。ライン化過程の問題点としては、管理監督者は上意下達機能には慣れているが、下意上達機能には習熟しにくいこと、したがって聴く姿勢に抵抗感のみられること、またむづかしい事例に直面し、リスナーが当惑する場面もみられたが、第2次ケアの体制を整備したことで解消され、なによりも関係者の人的資源に恵まれたことが成功した要因と考え

られたということであった。

6. 職場適応と家族のサポート



森谷先生は社外の心理相談員の立場からの発言で、まず新入社員の直面する問題として、家族からの分離不安ということがありとされた。これに対して支援しなければならない上司、先輩、中間管理職は非常に多忙で時間がない。このような人に代わって心理相談員の活躍場面が増加する可能性があるとのべられた。また面接事例の経験から、若い従業員に対し家庭の崩壊、家庭のホテル化の現代では家族の精神的援助が不十分であり、また寮管理者の意識改革も不十分であることから、従業員がMan Powerを十分に発揮するためには、家族問題に足をひっぱられないようにする必要があり、そのためには企業は労働時間の短縮をはかるとか、崩壊家庭再建への支援活動をするとか、職場と家庭は2つの異なった無関係の環境ではあり得ず、相互にきわめて密接な関連にあることを認識する必要がある。その意味で家族の問題については、もうすこし深く理解しなければならないことを強調された。

追加討論

池田先生：西欧と日本の宗教の違いから、西欧では神に対する誓いを重んじ自我が確立しているのに対し、日本では調和を大切にし義理人情を重んずるのあまり、過剰適応の傾向すら生じていると指摘された。

森谷先生：心理相談員は職場とある程度距離のおける人でないとうまく機能しないのではないであろうか。また第2次ケアの立場からすると、最初リスナーの態度が相談室の活動を左右すると思われる。

橋本先生：リスナー教育の成果として上司の態度に変化がみられ、部下への話しかけや家族への接触など気配りがみられるようになった。しかし監督者によっては自分ですべて手がけて苦悩した事例や配置転換時の悩みなどがみられた。また、リスナー教育に長時間当てるのがむづかしく教育時間を短縮したところ、やはりまずいところが出てきて反省している。

入谷先生：適応限界は個人差が大きく、狭い人を広くするための支援は教育担当者が適切であって、産業医ではいささか心苦しい。

小峰先生：適応限界の個人差は1対千以上あるだろうと思われる。適応限界を広くするには教育により知識を与え、かつ訓練し習熟したかどうかチェックしていくことが大切である。

まとめ

最後に司会の坂本先生がまとめの言葉をのべられた。精神保健についての援助者の心構えとしては、多面的に人のいうことが聴ける心を持つことと、チームアプローチによってお互いの知恵を持ち寄り、各々の役割を明確にして忠実に実行することが大切で、精神保健を担当するものは、みんながそんな人間に成長していくことが必要なのではないかと結ばれた。

新春随想

産業衛生に関する国際交流

井谷 徹 (名市大・医・衛生)



去る10月、産業医科大学で開催された国際会議に参加したフランスの産業医、産業医学研究者などが、北九州、中国、近畿、名古屋、関東の各地を回り、日仏産業医交流会を開催しました。名古屋では、島会長を中心とした東海地方会がお世話をし、工場視察などの活動が行われました。中国地区は、私が担当し、産業医活動に関するミニ・シンポジウムやホームステイによる文化的交流などを行いました。ミニ・シンポジウムは福山市医師会の協力を得て開催し、日仏両国から産業医の教育制度、活動内容などについて報告されました。その後、質疑と討論が予定時間を1時間近く超過して行われ、盛会裡に幕を閉じました。日本側からは、広島県医師会の香川先生から、嘱託産業医を対象にしたアンケート調査結果を中心に、嘱託産業医の活動状況が報告され、わが国の産業医活動の実態がよく分かったとフランス側から好評を得ました。外国の労働衛生の制度や活動実態の話聞いた場合、法的な制度は理解できるが、活動の実態となるとよく分からないことがしばしばあります。その理由としては、1) そもそも、実態を把握していないので紹介できない。2) 法制度と違い、実際の活動にはバラエティーが多く、簡単に説明できない。3) 社会における1つの制度は、その社会の他の制度や社会的因習、伝統的思考方法と相互に関連し合っているため、1つの制度を社会から切り離して理解することは難しい。4) 国際的な場になると愛国心が働き、きれい事を並べたくなり、実態が伝わらないことなどが考えられます。「実態を知るには2、3年住んでみる必要がある。」と言われる所以もそこらにあるのではないのでしょうか。

国際交流を更り多いものにするためには、相互に相手国の実態を知ることがまずもって重要です。今回の交流活動を通じ、自国の実態を分かりやすく紹介するための努力の重要性を再認識するとともに、違った社会に住むものが相互に理解し合うためには、根気よく交流を続けることが重要だということを実感しました。

産業看護部会の発足におもう

荻田 佳子 (東海銀行)



産業看護部会発足について当時の記憶を辿ってみると、S57年4月第7回産業看護研究会が名古屋で開催されるにあたり、当研究会世話人代表深沢さんより当時の地方会々長皿井先生へ各地方会毎に産業看護研究会を設置したいので東海地方会にも是非会の設立をしてほしい旨申し入れがあったことに端を発しているように思う。

その頃既に東海地方には愛知県を中心に健康管理業務に携ってい

る保健婦、看護婦、女子衛生管理者から成る「衛生管理業務女子研究会」が活発に活動を展開していた。岐阜、三重、静岡にも同様な会が出ていた。そこで新しい会を発足させるのも屋上屋を重ねることになりかねない。そのまま移行するのも無理があり当面は第7回全国集会の企画運営と産業看護研究会事務局と4県にある会とのパイプ役として名古屋鉄道小野チトさんと筆者がその任にあたることになった。その後小野さんの停年退職に伴い同社和田晴美さんが引き継ぎ現在に至っている。この間の活動はS57年4月、S62年10月、H2年7月の産業看護研究会全国集会を主催した。その他1) 産業看護カリキュラム試案に対する意見、要望。2) 産業看護事例集の発刊。3) 産業看護の定義、役割及びワーキングガイドの作成等である。幸いにして上記集会はいずれも盛会裡に終了出来た。

このことは、当地方会産業看護職の意識の高さと熱意の賜物と心から謝意を表したい。また盛会の裏には常に産業医の先生方の絶大なご支援があった。ここに紙面をお借りし厚くお礼を申し上げる次第である。

新年にあたりこの様に様々な経験を礎により友好に活動し得る専門職組織の整備を改めて考えてみたいと思う。

週休2日制について

井奈波 良一 (岐大・医・衛生)



明けましておめでとうございます。今年もよろしく願い申し上げます。さて、最近、わが国でも週休2日制を導入する企業が増えている。この制度をさらに推進するため官庁では今年から完全週休2日制が導入されようとしている。昨年の総理府の「労働時間・週休2日制に関する世論調査」でも回答者の61.7%が労働時間の短縮を望んでいた。この点に関し、われわれに關係することに目を向けてみると、少なくなりつつはあるが学会や研修会が、依然として土曜日や日曜日に行われているのはなぜであろうか。講師の先生方のせつかくの休みをつぶすことになるし、学会の準備や世話のためにせつかくの休日をつぶすなんてこともあるのではないだろうか。また、無理をお願いをして演題をだしてもらったり、参加してもらっている会もあるらしい。せつかく推進されている週休2日制を売のある形で実現するためにもこの慣習をなくす必要があると考える。

というのは、私は学会や研修会は本来、仕事に属するものと考えからである。このためにも同じ様な学会、研修会はまとめて平日に一度に開催すべきであると考えている。機会を得て昭和62年5月から6ヶ月間フィンランドに留学したが、その際、土曜日、日曜日に会社に出て来るひとが皆無に近かったことに驚いた。デパートも土曜日は午後2時くらいに閉り、日曜日は閉店していた。わが国では便利さをもとめるあまり年中無休の店が増えつつある。こういうものをなくすことが、週休2日制の推進や人手不足の解消につながるのではないかと考えている。帰国してまもなく週休2日制の試行が始まり大変ありがたかった。それと同時に休むことに罪悪感がなくなった。今年こそ休日が本来の休日になることを期待している。

最近思うこと

橋本 隆 至 (橋本歯科)



我が橋本歯科も開業6年目を迎え、従業員も開業当初と入れ替わり、新しい時代の移りかわりを感じています。

今年は、2名の従業員の結婚式に来賓として出席し、自分もそのような年齢に達したのだなあと思うと同時に、責任ある上司として自分が匹敵するのかわ

か、我が身をみつめ直す良い機会にもなりました。新従業員も増え、さらにフレッシュに再出発の我が医院にも、労働時間短縮問題や、従業員教育等、まだまだ取り組まなければならない課題はたくさんあります。

最近、家族旅行に日本国内は混雑しすぎるので、近場で行ける海外へ出かけることが多くなりました。今年の夏も、少しはよい夏休みを取って、香港へ行って来ました。香港はとてエネレギッシュな都市で、人々が活気に満ちあふれているのが印象的です。

毎回、海外に出て、なかなかじめないのがチップの習慣です。ホテルやレストランで、無意識の間にチップが出せるようになるのは、いつのことでしょうか。また、医院の都合上、短期間のみしか滞在できないので、その国の風習や通貨がやっとわかりかけた頃、帰国しなくてはならないのが、残念です。国際社会といわれる昨今、日本国内においても色々な国の文化を吸収し、日本のそれと融合し、お互いの文化を尊重できるようにしていけたらと常に思っています。

私の医院も名古屋港に隣接するためか、時折外国人の患者さんがみえます。通訳の方と同行される方もいますが、時には私のたどたどしい英語での対応が必要となります。その度に自分の英語力のなさにガクゼンとしてしまいます。外国人労働者も増加しているとき、語学力はますます必要になってきている気がします。

余暇のひとつ

菅 沼 世津子 (本田技研浜松)



晩秋のある日デパートで茶会が催されたので、友人と連れだって出かけた。特設会場の四方所に設けられた茶席は、どこも大勢の人出で着物姿が多く賑やかであった。静岡県はお茶の産地のせいか茶の湯が、わりあい盛んである。私も独身

時代の一時期礼儀作法を習う目的で、少し稽古したことがあった。子供達が親許を離れてゆく年頃になったので、数年前から心のゆとりを持つと、再び茶の湯を習い出した。師は近くに住む元会社の先輩なので気楽な気持ちで出かけている。茶道は形とか約束ごとが多いので50才過ぎの手習は、殊更覚えが悪く一度や二度聞いただけでは、翌週の稽古日に忘れてしまうことがある。自分では年のせいにして恥とも思わず何度も聞いたり、注意されるが、一向に気にもしないので先生は呆れているようだ。しかし、余程の事が無い限り土曜日の午後になるといつもの茶

室にいる。作法を覚えることより職場とは違った仲間に会い、おいしいお菓子を食べながら語り合うのが楽しみである。床の間の掛軸を見て書の美しさや意味を聞いたり、茶花を眺めるのも好きだ。お茶を点てる茶碗や茶杓、水指など道具の取り合わせに、必ず季節を考慮している事に感心させられる。客にお点前する時は神経を集中し雑念を捨て、相手の事を考えて熱過ぎず、ぬる過ぎないよう湯の分量と湯加減をし、丁度良い飲みごろになるよう気を配っている。又、静かな部屋で茶の湯が煮えるシューンという音を聞き、緑色をした茶を頂くと精神的な疲れがとれ、いらいらや心配事などのストレス解消になる。お茶を点ててくれた人に対しては、自分のために道具を整え湯加減をみて、丁寧に点ててくれた事に感謝の気持ちが湧いてくる。私は茶の稽古をして物を大切に扱うこと、心にゆとりを持ち、時間を大切にすることなど多くを学んだように思う。初釜には久しぶりに着物を着てシャンと背を伸ばし、仲間と談笑するひとときを、今から楽しみにしている。

保健指導とは…と思うこと

中 川 祐 子 (東芝三重)



随想の原稿依頼があり、お引き受けはしたものの何を書いて良いやら考えが浮かびませんが、日頃感じていることを書かせていただこうと思います。今の私は産業保健婦として雇われているものそれらしき仕事もろくにせず、毎日反省しながら過ぎて行きます。昨年6月の東海

地方会研修会(岐阜)に於て、『事後措置』について喋れと言われ、改めて勉強し直し、いかに私は手抜きでいいかげんな健康管理をやっているか反省させられました。又、昨年の健診後、21歳のS君が肥満から精密検査となり、中性脂肪が正常の3倍の数値を示し(他は正常範囲)、保健指導に回されてきました。彼と生活状況・食生活等を中心いろいろな話し、結果、食事不規則・朝食抜き・タバコ一日40本・毎日残業で帰りが遅い等ということでした。又、缶コーヒーが大好きで一日7~8本飲むということでした。彼にとっての問題点はいろいろありましたが、とりあえず缶コーヒーを1/3にしようと思われ、彼もやる気を見せてくれ、約束しました。2カ月後の再検査の結果、正常範囲となり喜びましたが、周囲から『彼は他の病院へ行き、薬を飲んでた』との情報を得ましたし、彼が相変わらず自販器で缶コーヒーを買う姿をみかけます。昨年11月、坂本弘先生(三重大)の御講演を聴く機会があり、その中で先生は『保健指導ということをよく考えろ、保健婦主体の指導ではない。病める像について目を向けるのではなく、人間の側が適応するための助っ人としての我々であるべきだ』とおっしゃられました。つい我々は『××をやってあげる』『我々のイベントには患者は集まってくるものであり、言うことをきくものだ』と思い込んでしまう。人間をさらに理解し、我々のすべきことを深く考え、患者主体の保健指導ができるよう努力が必要だと反省し、何年かかるかわからないけれど、患者さんには悪いけれど、失敗させてもらいながら勉強し、成長していこうと思っています。

話 題

日仏産業医交流会開かれる

谷 脇 弘 茂 (藤田保衛大・医・公衛)



昨年の10月28・29日の両日、名古屋において日仏産業医交流会が開催された(表1)。そもそもこの交流会は、2年前フランスのルーアン大学産業医学研究所の Prof. Caillard が日仏産業医交流を提案し、大久保利晃教授(産業医大)を団長とした総勢14名をフランスに

招待したことから始まる。もちろんこの旅行には私も参加し、旅行記として地方会ニュース第14号に掲載している。

今回日本を訪問したフランス産業医は18名であり、Dr. Saux だけが旅行途中で帰国した(表2)。尚、このメンバーの中には、1993年フランスのニースで開催される第24回国際労働衛生会議(ICOH)の Committee として8名が選出されており、また Prof. Caillard と Dr. Saux は Chairman を任命されている。まさしくフランスを代表すると言っても過言でないメンバーで構成されていた。彼らは産業医大国際シンポジウムに参加後、中国、近畿地区を経て東海地区に立寄った。

名古屋来訪当日の昼過ぎ、中国地方で地震が発生し、その影響で13時以降の新幹線は、軒並み1時間から1時間30分程度の遅れが出ていた。しかし幸いにも彼らの乗った新幹線は数分の遅れで無事JR名古屋駅に着いた。彼らをホームで出迎えたのは島会長はじめ我々4名であり、簡単な挨拶を交した後、それぞれタクシーでホテルに向かった。

午後6時よりウエルカムパーティーが開催され、フランス産業医17名、産業医大から2名、東海地方会関係者41名、合計60名の華やかな立食パーティーとなった。この中には会話の手助けをして頂く5名の Coordinator (医師) が含まれていた。パーティーは表3に示すようなスケジュール内容で行われた。日本側のスピーチはすべて仏語に通訳し、出席者全員が理解できるよう配慮が取られた。フランス側からは Prof. Caillard が代表して挨拶し、また来日したフランス産業医の紹介を行った。そして今後は何かテーマを持って日仏間で討論したいと述べた。パーティーは盛り上がり、終了予定時刻を30分延長して閉会した。

閉会后、Dr. Doppler は五藤雅博先生(旭労災病院)宅へホームステイし、Prof. Caillard、Dr. Faucon、Dr. Routier、Mme Fanchette の4名は島会長宅へ招待され、2次会の歓迎を受けた。残ったフランス産業医12名のうち10名は、我々と共に夜の名古屋城を見物した後、錦3丁目の居酒屋へ飲みに行った。そこでは日本酒と蜂の子や銀杏等を賞味し、午後11時過ぎに解散した。

翌日はトヨタ自動車のご好意により、バスを1台チャーターして頂き、午前8時にホテルを出発し、まずはトヨタ高岡工場へ向かった。ここでは、カロラ、コルサ、サイノス等の車種が生産されて

おり、組み立て工程を中心に見学させて頂いた。時間の都合から約1時間足らずの見学であった。次にトヨタ健保会館を訪れ、従業員に対する健診項目の説明や医療機器、血液検査室の見学等を約30分間行なった。そして場所をトヨタ会館に移して discussion が行われた。まずトヨタ自動車で長年産業医活動を行われている入谷先生から、トヨタ自動車における健康管理体制が紹介され、その後フランス側からの質問を受けて頂いた。しかしフランス産業医には、あらゆる分野の専門家が集っているため、多種多様な質問が飛び出した。その中でも精神衛生、腰痛対策に強い関心を示し、かなり専門的な討論になったため、たびたび通訳の方を悩ます結果となった。昼食時間がなくなる恐れが出てきたため、途中から昼食を摂りながらの討論となった。1時間余りに及び討論の後、トヨタ会館内部を足早に見学し、予定より20分遅れて徳川美術館に向かった。

徳川美術館は、先日天皇陛下が御覧になったばかりであった。美術館に入館して先ず彼らが立ち寄ったのは土産売り場であった。日本に大変興味を持つ者は、一般的なお土産の他に、厚い歴史本まで購入していた。

午後4時33分、全ての日程を無事消化し、新幹線でJR名古屋駅から東京へ向けて出発していった。別れ際に見せた彼らの無邪気な笑顔を見た時、私は安堵感より寂しさが強調される心境であった。

最後にこの紙面をお借りしまして、島会長初めご協力頂きました東海地方会関係者の方々、多大なご援助を頂きました入谷先生初めトヨタ自動車健康管理室の方々にご心より感謝申し上げます。

表1. 日仏産業医交流会東海地区スケジュール

10月28日(月)	16:04	名古屋駅到着
	18:00	
		ウエルカムパーティー
	20:00	
10月29日(火)	8:00	ホテル出発
	9:00	トヨタ自動車高岡工場見学
	10:20	トヨタ自動車健保会館見学
	11:00	トヨタ会館にてdiscussion及び昼食
	14:00	徳川美術館見学
	16:33	名古屋駅から東京へ出発

表2. 日仏産業医交流会参加者(フランス)

Dr. Caillard	男性	ルーアン大学産業医学研究所主任教授 フランス産業医学連合議長 フランス労働省産業保健予防最高会議会員 ストラスブルグ ルイ・バスターール大学教授
Dr. Cantineau	男性	人間工室室長・産業医
Dr. Doppler	女性	リアル労働医療監査官
Dr. Eloy	女性	ウエスティングハウス産業保健婦
Mme Fanchette	女性	サンテティエンス地方ベルヴェール病院・産業医
Dr. Faucon	男性	リアル大学産業医学主任教授
Dr. Furon	男性	リアル産業保健サービス部門長 北フランス産業医学および人間工学研究所部門長
Mme Furon	女性	Dr. Furon夫人
Dr. Gournay	男性	バスノルマンディ地方の労働医療監査官
Dr. Nahel	男性	モンサンテニャン大学人類学講師
Dr. Schlumberger	男性	フランス電力・フランスガス会社産業医部門副部長
Mme Schlumberger	女性	Dr. Schlumberger夫人
Dr. Varela Novo	男性	スペインVigo地方のエスキューラー大学産業医学教授
Dr. Routier	女性	ヴァランス労働衛生協会産業医
M. Paillereau	男性	フランス企業内、企業外労働衛生中央情報局副局長
Dr. Smolik	男性	ブルゴーニュ人間工学産業医学研究所 ディジョン大学産業医学助教授
Mme Smolik	女性	Dr. Smolik夫人

表3. ウエルカムパーティースケジュール

「歓迎のことば」	
島 正吾	(東海地方会長)
服部於菟彦	(愛知県医師会理事)
「挨拶及びフランス産業医紹介」	
Caillard Jean-Francois	(ルーアン大学教授)
「開宴のことば及び乾杯」	
竹内康浩	(名古屋大学教授)
「挨拶」	
大久保利晃	(産業医科大学教授)
「閉会のことば」	
井上 俊	(名古屋大学名誉教授)

フィリピンよりただ今帰還

久永直見(名大・医・衛生)



1. 水準点： マニラ首都圏西南部の海岸通りにラスピナス教会がある。ここは、竹で作られたパイプオルガンで名高い。人の出入りが多い日曜日の教会には、竹管をくぐりてた鄙びた音色が、線香の煙のようにたちこめていた。植民地時代からの雨風に耐えてきた石造の教会

のおごそかな雰囲気の中に暫く佇み、表に出たとき一人が、「あれは何だろう」という。みると、教会の石壁の地面近くに砲弾の頭のようなものが出ています。直径10cm程の真鍮の滑らかな表面に漢字で「水準点・比島測定局」と刻まれていた。50年近く前、ここを水準点と決めて測量をした日本人がおり、今その前に国際協力事業団からフィリピン労働安全衛生センターに派遣された一行が立っている。日比両国の関係を改めて考えさせられた。

2. 腹痛の患者： 8月23日、サント・トマス大学付属病院からの紹介患者が安全衛生センターに来た。腹痛と貧血が主訴の38歳の男性で、輸血も受けていた。塩ビ樹脂成型工場の原料秤量係で、ステアリン酸鉛粉塵を吸うため、鉛中毒を疑われ、血中鉛の測定のために来たのだった。鉛作業歴10年、最近の勤務は日曜も含めて毎日7時から19時で、家族は妻、子供6人。教会に行くのは日曜の夜とのことだった。検査の結果は血中鉛90、Hb8.0、好塩基性斑点赤血球多数であった。その後、健康管理部門では職場調査、職業病認定につき話し合った。ついでにいうと90年度の健診で平均血中鉛67だった畜電池工場では、マスク着用と300万ベソ(1500万円)を投じた局排の設置がされるなど、一方では改善も進んでいる。

3. 有機溶剤職場： 91年度の重点課題は、有機溶剤職場の健康管理で、印刷、塗料、接着剤、履き物、金属機械などの工場について個人曝露濃度測定、尿中代謝物測定、健診が実施された。局排設置は稀で、一部では環境測定中に頭痛、めまいを覚える高濃度曝露職場もあった。マニラ東部のシューアベニューの職場調査に行ったのは、烈日の下すべてが白っぽく見える日であった。履き物を作る小工場が密集しており、10カ所程の現場をみせてもらった。小学生も器用な手つきで働き、ベンゼン入り溶剤が使われ、刷毛より能率がよいと指で接着剤を塗っていた。

4. アバンテ： 1年の活動を通じて、フィリピンでは、粉じん、有機溶剤・鉛等の有害物、重筋労働、上肢反復動作、長時間労働など様々な問題が、日本に比し、短期間に圧縮された形で顕在化しつつあるとの印象を受けた。センターには、牧野茂徳先生、私に続き、吉田勉先生が赴任予定(92.4-93)で、東海地方会との人的関係は深い。アジア諸国との産業衛生分野での協力が重要さを増している今、一度マニラを訪れてみませんか。困難にめげずアバンテ(前進)をめざす人々に会えるでしょう。

フィンランドの労働衛生状況

榊原久孝(名大・医・公衛)



「森と湖の国」フィンランドは、面積は337,000km²と日本より若干狭く、人口は500万人で日本の約1/25です。戦後の工業化は著しく、農業人口は、1950年には46%であったのが、最近では約10%に減少しています。産業は、木材・パルプ産業、金属・機械産業が中心で、この

2つで輸出額の約70%を占めています。

フィンランドの年間総労働時間は、1960年代までは2100時間を越えていましたが、1970年週40時間制導入後には2000時間を割り、現在では1700時間余りとなっています。年次休暇は勤続年数により異なりますが3~6週間あります。私の留学先の労働衛生研究所でも毎日の労働は、多くの人は朝8時から午後4時まででそれ以降はほとんど人がいなくなって閑散としていました。6月から8月は、労働時間は7時間になり、帰宅時間は午後3時となります。仕事終了後には、テニスやジョギングなどを各自楽しみ、土日の週末には別荘などでのんびり過ごしているようでした。年休は多くの人は6月下旬の夏至を過ぎた頃から連続で取り始めるため、7月の出勤者は本当にまばらで、研究所の食堂も閉鎖されていました。

職業病の発生数は、1989年の資料で8,869となっています。1985年は6,251でしたので、増加傾向にあります。特に反復繰り返しまたは単調労働による障害(肘関節障害を含む)の発生数の増加が目立ち、85年2,150であったのが89年には4,063と、職業病全体の46%を占めるようになりました。発生数でいうと、次いで騒音性難聴で1,668、皮膚疾患1,589(刺激性皮膚炎717、アレルギー性接触性皮膚炎560など)、呼吸器系疾病1,129(喘息340、アレルギー性鼻炎228、アレルギー性肺炎210、石綿肺107など)が主だったものです。私の関係する振動障害の自指発生は57となっています。我が国の89年の業務上疾病の発生数は12,465ですから、人口割合から見るとフィンランドの発生件数は、我が国よりかなり多いこととなります。ただ病気の程度は、軽い例が多くなっているようです。

各職場では、労働環境保護のため、10人以上の職場では1名の労働保護委員が選出され、20名以上の職場では労使よりなる労働保護委員会が設けられて活動しています。行政的には、14の地方労働保護事務所が10人以上の職場に関し責任をおっており、10名以下の職場については、自治体の保健センターに属する労働保護監督官によって担当されています。一方労働衛生サービスは、多くの大企業は自社にその施設をもっていますが、そうでないところは全国各地にある213の自治体の健康管理センターで受けています。1984年末には、自営業者を含め労働者総数の80%がこのサービスを受けるようになったということです。

フィンランドでは、他の北欧の国々と同じく、国民の人権意識が強く、それが労働衛生状況にも反映しているように感じました。

平成3年度東海地方学会

東海地方学会を担当して

竹内 宏一 (浜松医大・公衛)



平成3年度の学会を、11月16日(土)に開催した。まず、いろいろな面でお世話になった学会員の皆様に御礼申し上げます。

今年度の新しい試みとして、本学会に参加すれば「日本医師会認定産業医」の単位を取得できるように致しました。午前中が「基礎研修(後期研修)」2単位で、午後は「生涯研修(専門研修)」3

単位となりました。

さて、当日の午前中は2会場に分かれて発表を行い、演題数は一般講演16題と要望課題「中小事業所における健康問題と対策」7題の合計23題であった。午後は2題の特別講演を行い、第1席は清水善夫先生の「職業性疾病事例から学ぶものー労働衛生指導医としての経験からー」、第2席は館 正知先生の「産業医の専門性について」であった。

今回は、前述したように認定産業医の研修を兼ねることにしたので「中小事業所における健康問題とそれらを支援すべき産業医のあり方」に焦点を当てた。つまり、意図した流れは、午前中の要望演題において、中小事業所におけるさまざまな健康問題について出させていただき、ついで午後の特別講演の第1席で、静岡県における過去の事例を分析していただいた。それらをふまえて、第2席ではそうした労働者を支援するには、産業医はどうすべきか、どうあったらよいかを講演していただいた。

中小事業所の産業医は、ほとんど開業医の先生方が担当されているので、それらの方々と本学会が共通の場を持てればと意図した訳です。しかし、開催してみても思ったのですが、こうしたこと自体が難しいです。例えば、開催する曜日ですが、多くの開業医の方は、土曜日にも診療されているので、主旨を徹底しようとしたら日曜日に開催の方が良いかもしれません。そうしたら、本来の学会員の方の出席者が少なくなるかもしれません。

また、一般講演の持ち方について、発表が終了した時点で、関連領域の全国学会における最近の研究動向について、コメントしてもらおう形式も考えられます。しかし、そうすれば時間を要することになり、会場の設営も難しくなります。いずれにしても、開業医の先生方と共通の場を持つことをうまく設定すること自体がなかなか難しいことだと思いました。(同じような問題は、学校保健学会でも校医の先生方と共通の場を持つことの難しさで共通しています)

ところで、小さな学会でも、学会の準備にはいろいろと気を使います。ちなみに、今回ワープロ化した連絡文書だけでも約20枚になります。エネルギーを有効に使いたいと願っています。しかし、そんなことをいってはられません。来年7月10日(金)には、東海公衆衛生学会を開催しなければなりません。

「さあ、頑張らなくっちゃー」



研究会

第22回職業アレルギー研究会

早川 律子 (名大分院皮膚科)

1991年7月19日、グランドホテル浜松に於いて、第22回職業アレルギー研究会(佐竹会長)が開かれた。今年から、当研究会は日本アレルギー学会の研修会の一つに指定され、従来の closed member 制から open 制に改変された。今回は、受賞記念講演 I、II、一般演題、シンポジウム I、II と充実した研究会であった。生井先生の第3回石崎賞受賞記念講演「野生蜂毒アレルギーの研究」では営林署職員において高率に発生する重症蜂アレルギーについて、勝谷先生の第2回光井賞受賞記念講演「ホヤ喘息から木材喘息までー30年の回顧ー」ではホヤ喘息に対する様々な工夫について伺うことが出来た。一般研究では職業性喘息、職業性肺疾患、蜂アレルギー、OS-oil による鼻粘膜過敏、金属による液性免疫応答の増強など11演題が報告された。シンポジウム I 「メタルによる職業性アレルギー」ではアルミニウム、ロジウム、ベリリウム、超硬合金による障害について、シンポジウム II 「化学物質による職業性アレルギー疾患」では、過敏性肺炎、喘息、接触性皮膚炎、農業によるアレルギー疾患について報告された。一般研究で活発な討論が行われ、予定時間をオーバーし、大幅にスケジュールが遅れていたため、シンポジウム I、シンポジウム II ともに時間が不足し、フロアーからのコメントや質問を受ける十分な時間がなかったことは残念であった。研究会終了後、ホテルの別館で盛大な懇親会が催された。

第17回職業性アレルギー研究会

吉田 勉 (藤田保衛大・医・公衛)

平成3年7月12日(金)、慶応大学付属病院会議室において第17回職業性アレルギー研究会が約25名の出席で開催された。

今回は、桜井治彦先生(慶応大学)が世話人となり、一般演題3題、特別講演2題で構成された。

一般演題は、上田 厚(鹿大)先生による「症例収集の解析から」では、現在収集中である職業性アレルギー症例について気管支喘息が6例、皮膚炎が82例収集できたことが報告された。山中すみえ(東京歯大)先生の「金属アレルギー発症に関する基礎的研究」では、歯冠による金属アレルギーの豊富な臨床事例が報告された。日下幸則(自治医大)先生は、「超硬合金喘息におけるコバルトとニッケルの感作性作用」について、今までの臨床事例と研究成果を中心に報告された。

特別講演の中山秀夫(済生会中央病院)先生は、実に豊富な職業性皮膚障害事例につき、診断、治療、予後、そして予防のための労働衛生的アプローチについて具体的な成果を講演された。その精力的なお仕事には強い感銘をうけた。園田稷伸(花王)先生は、洗剤、化粧品メーカーの研究所に勤務しておられ、主にモルモットとマウスによる感作性試験の方法論、新しい実験手技について、大変解りやすく講演して下さいました。尚、次回の職業性アレルギー研究会は平成4年2月14日(金)に鹿児島で開催される予定である。

第34回労働衛生史研究会

五 藤 雅 博 (旭労災病院)

第34回労働衛生史研究会は、平成3年10月19日(土)午後2時より5時まで名古屋大学医学部鶴友会館2階大会議室で行われた。当日は島会長はじめ多くの地方会メンバーの出席があった。また近畿地方会から丸山博先生、原一郎先生などの顔もみられた。まず世話人の野村茂先生(労働科学研究所)より、研究会が初めて名古屋で開催されることの紹介があった。次に司会の三浦豊彦先生(労働科学研究所)から、一般演題の最初の演者として井田龍三先生(岐阜県労働基準協会連合会)が紹介された。井田先生は「東海繊維産業の変遷と労働衛生」と題して、まず紡績の時代では結核・赤痢の予防、夏期対策(ビタミン不足、慢性疲労)、化学繊維の時代には、二硫化炭素中毒の問題、合成繊維の時代には、アクリルニトリルの問題について述べられた。次演者の岩田国夫先生(全国窯業労働組合連合会)は「塵肺根絶への途を求めて」と題して、珪肺法の立法化運動及びじん肺法への改正の経緯、労使協定の締結や旭労災病院の設立、またじん肺行政・民事訴訟について述べられた。続いて名古屋大学名誉教授井上俊先生が「日本産業衛生学会東海地方会史を編纂して」と題して、地方会史製作の経緯を話された。鯉沼会長時代を幼年期、皿井会長時代を青年期にたとえられ、東海地方会を一個体の成長としてみるという言葉は印象的であった。締めくくり歴史の意義を述べられ、特に資料を残すということの重要性を強調された。最後に島会長から、非常に盛会であったことに対して、お礼の言葉があった。

日本産業衛生学会産業保健全国大会

清 水 善 男 (三菱電機静岡)

春の学会総会で部会制が承認され、定款改正に必要な臨時総会も8月31日無事に済んで10月12日に日本産業衛生学会・産業保健全国大会が日本教育会館一ツ橋ホールで盛大に開催された。

日医常任理事・瀬尾 攝氏と労働省労働基準局局長・佐藤勝美氏の記念講演に続いて、パネルディスカッション「産業保健活動の今後の展望」が行われた。パネルに先立った経過報告で産業看護部会担当の前田和子理事は、国際的な動向も踏えて法制としての「専門産業看護職」制度の確立を訴えられた。

生憎の台風襲来でシンポを終りまで聞かずに席を立ってしまったが、NKK常務取締役・前原秀木氏の基調講演「これからの企業経営からみた産業保健活動」は、経営側が素直に話されたものとして印象に残った。若年労働力の不足、産廃関係も含めて深刻な環境問題、国際摩擦の三つを挙げて、今は経営環境の大きな転換期であり、これに対応する経営戦略の一つとして「多様化した人」に対する問題が大きな課題になると述べ、そのために産業保健の専門職がグループを企業組織の中でどう位置づけるかを縷々説明された。多様化した従業員を抱えて、その社会人としての健康を維持し、企業全体の活力低下を防止して「組織の健康」を確保して行く、これが今、産業保健に求められている新たな経営戦略の一つだという主旨ではなかったかと受止めた。なお、同日付で刊行された冊子「産業医活動委員会の歩み」も貴重な資料集である。

第3回愛知労働安全衛生 コンサルタント会研修会

柏 木 時 彦 (柏木事務所)

第3回愛知労働安全衛生コンサルタント会研修会が、平成3年10月26日、名古屋市の国際サロン(毎日ビル9階)で開催された。参加者は12名であった。研修会は、愛知地方会員から、どのように安全衛生診断をしていけばよいのかといった診断手法の要望が強いため、実際活動しておられる地方会員の診断事例を発表していただき、相互に研鑽していく形式をとっている。今回は、衛生診断のすすめ方というテーマで、歯科医師の金山敏治先生、衛生工学の石田修先生から事例を発表していただいた。金山先生は、本職の歯科医師のかたわら熱心にコンサルタント活動をやっておられるが、台湾・シンガポールにある海外進出企業の診断事例や、中小企業の鋳物工場や石屋の診断事例を発表された。石屋の衛生問題は、粉じんによるじん肺や騒音性難聴と思っていたが、粉じんによる吸入で前歯が欠けてくると指摘された時、さすがだなあと感じた。石田先生は、コンサルタント活動を専業とされており、企業には顧問という立場で継続的に指導されている。そのため改善指導は、局所排気装置を中心とした大がかりな工学的改善まで手がけられていた。両先生ともスライドをまじえ、説得力のある話しぶりに、これからの私のコンサルタント活動に大いに役立つことが多かった。

第13回アジア労働衛生会議

竹 内 康 浩 (名大・医・衛生)

アジア労働衛生会議は東南アジア人間工学会議と共催で11月25~27日にタイ・バンコクのセントラルプラザホテルで開かれた。会場はバンコク市の郊外で飛行場と市街の中間にある立派なホテルで、総会も分科会も会場としては快適であった。開会のセレモニーに続いて学会長賞受賞講演は中国のGaoさんの「グリンジルメタクリレートの変異原性についての分子レベルでの研究」が行われた。それに続いて、Keynote addressとして、Mikheev (WHO), Kogi (ILO), Caillard (ICOH) の3名が行い、Special lectureとしてPhoon (Australia), Wisner (France), Ziegenfuss (Germany), Boggs (Belgium) から4題が行われ、教育的に有益なものであった。一般演題は第1日の午後3時15分から5時までと第2日の1日中、口演発表4会場とポスター発表1会場に分れて行われた。口演発表の各分科会のテーマは労働関連疾病、人間工学とその応用、化学物質による健康障害と予防、産業衛生であった。第3日は3つのシンポジウムと最終総会が行われた。分科会の会場は適当な大きさで、アジア各国のなまりのある英語で戸惑う場面も見られたが、質疑や討論が活発に行われた。日本からの参加者はいつものように多数であったが、韓国や台湾からの参加者が少ないように感じられた。アジア労働衛生会議はアジアの産業の発展を反映した実りある内容が期待されており、アジア諸国の研究者の日常的な情報交換により、内容や方向性をもっと充実させる必要があるように思われた。学会開催時のバンコクは乾季に入っており、連日晴天で、日中は31度を越え、外を歩くと日本の真夏の様な日差しであった。タイには外国の援助で建設された広い道路が整備されており、沢山のトラック、乗用車、オートバイなどが走っており、活気は感じられたが、バンコク市街の交通渋滞はひどく、排気ガスによる大気汚染は相当なものと思われた。

会員の表彰

労働大臣功績賞	鎌田 隆 (本田技研浜松)
労働大臣功績賞	吉野 貞尚 (前旭労災病院)
労働大臣功績賞	野村 新爾 (日本硝子繊維)
中災防緑十字賞	中尾 一吉 (松下電工津)

これからの諸行事予定

第8回産業医、産業保健婦、産業看護婦、衛生管理担当者 のための研修会

- 日 時 平成4年2月21日(金) 10:00~16:00
- 場 所 愛知厚生年金会館 鳳凰の間
名古屋市千種区池下町2-63 ☎052-761-4181
- 会 費 7,000円 当日持参(資料・昼食費を含む)。
- 定 員 200名
- 申込要領 参加申込書を平成4年2月3日までに下記事務局へお送りください。
〒470-11 豊明市沓掛町田楽ヶ窪1-98
藤田保健衛生大学医学部
公衆衛生学教室内
日本産業衛生学会東海地方会事務局
- プログラム
 - 10:00~10:20 挨拶 地方会長、事業部長ほか
 - 10:20~11:50 講演「職場における健康管理」
— 心電図を中心にして—
名古屋大学環境医学研究所 教授
外山 淳治
 - 11:50~13:00 休憩(昼食)
 - 13:00~14:00 講演「心の健康と音楽」
東芝EMIライブカンパニー
名古屋支店長 丹下 智晴
 - 14:00~14:20 休憩
 - 14:20~15:50 講演「心理相談員のための面接技法」
— THPの一環として—
愛知医科大学心理学 助教授
森谷 寛之

第25回中小企業衛生問題研究会全国集会

- 日 時: 平成4年1月25日(土) 10:00~16:30
場 所: 岐阜医学会館
(岐阜市司町5番地 0582-66-8482)

第5回職業性肺疾患研究会

- 日 時: 平成4年2月29日(土) 14:00~17:00
場 所: 国際サロン(名古屋駅前、毎日ビル内)
講 演: 気管支喘息の病態と治療
佐賀 務(藤田保健大・医・公衛)

フィリピンにおけるじん肺

久永直見(名大・医・衛生)

症例検討: 石綿肺癌その他(飛び入り歓迎)

第5回振動障害研究会

日 時: 平成4年2月29日(土)

場 所: 名大鶴友会館

第65回日本産業衛生学会

日 時: 平成4年3月29日~4月1日

場 所: 徳島大学

平成4年度東海地方会研修会

日 時: 平成4年6月19日

場 所: 四日市農協会館

地方会理事会

第3回理事会 平成3年9月10日(火) 名大鶴友会館 22名

- A 報告事項 本部・事務局からの連絡事項(島・吉田)
地方会ニュース(第22号)の発行について
(岩井)
- B 協議事項 平成3年度東海地方会学会について(竹内宏)
東海地方会誌(平成2年度報告)の発刊について(森川)
地方会ニュース(第23号)の発刊について
(岩井)
地方会関連研究会について
日本産業衛生学会 産業保健全国大会(島)
第33回労働衛生史研究会(島)
第33回産業精神衛生研究会(島)
日仏産業医学交流会(島)

第4回理事会 平成3年11月5日(火) 名大鶴友会館 25名

- A 報告事項 本部・事務局からの連絡事項(島・吉田)
研究会・研修会からの報告事項
第33回産業精神衛生研究会(森川)
東海労働衛生史(島)
平成3年度日本産業衛生学会東海地方会学会について(竹内宏)
日仏産業医交流会(島)
フィリピンにおける産業衛生事情(久永)
- B 協議事項 東海地方会誌の発刊について(森川)
「第8回産業医、産業保健婦、産業看護婦、衛生管理担当者のための研修会」について
(岩井)
地方会ニュース新年号(第23号)の発行
(岩井)
地方会関連研究会について
中小企業衛生問題研究会(岩田)
振動障害研究会(山田)
日本産業衛生学会(島)
東海地方会研修会(橋本)
汎太平洋石綿会議(島)

会員の消息

(平成3年8月14日~11月30日)

新入会員 20名

丹羽 実 (丹羽医院)、久田美香代 (三菱自工名古屋)、南 晴洋 (三河保健予防協会)、三輪正人 (大同病院)、森田まゆみ (大同病院)、丹羽珠実 (大同病院)、小森真由美 (藤田保衛大)、上野智司 (三菱自工名古屋)、東海智代美 (三菱自工岡崎)、小林花往里 (三菱自工岡崎)、西原信彦 (浜松市保健所)、池山真治 (大同病院)、河邊智美 (大同病院)、山崎 慈 (大同病院)、成瀬正春 (名市大医衛生)、城 憲秀 (名市大医衛生)、大野忠良 (大野医院)、佐藤昭彦 (大同病院)、松浦鉄治 (愛教大)、松下秀鶴 (静岡県大)

転出会員

溝部政史 (静岡→山梨)、原野 悟 (静岡→東京)

転入会員

久繁哲徳 (高知→三重)、井谷 徹 (岡山→愛知)

移動会員

浜島信之 (愛知→岐阜)

退会会員

高瀬 修 (静岡)、木下三郎 (愛知)、鈴木貞夫 (愛知)

編集後記

あけましておめでとうございます。毎回、新年号は年末年始にかかってしまい、原稿も印刷もあわただしい時期で、皆さんにご迷惑をおかけしています。地方会ニュースも本号で23号になりました。会員諸氏のおかげです。どうか今後ともよろしく願いいたします。昨年はバブルが崩壊して高度成長にブレーキがかかり、一方ソ連を中心とした社会主義国の政治経済の破綻等、めまぐるしい社会変化の多かった年でした。コメをはじめ市場開放も諸外国から迫られ、日本の今後多事多難です。労働衛生もこうした社会の動きをしっかりと見つめて今年も1年がんばっていきましょう。

(岩井 淳)

次回発行 平成4年5月1日

編集責任者 岩井 淳 (全日本労働福祉協会)

編集委員 (五十音順)

柏木時彦 (柏木事務所) 加藤保夫 (岐阜県産業保健センター)

五藤雅博 (旭労災病院) 後藤 猛 (ヤマハ健康管理センター)

小森義隆 (大同病院) 竹内康浩 (名大)

谷脇弘茂 (藤田保衛大) 中川祐子 (東芝三重)

久永直見 (名大) 森川利彦 (三菱電機名古屋)

吉田 勉 (藤田保衛大)

財団法人 愛知健康増進財団

会 長 田 中 精 一
 理事長 赤 塚 邦 夫
 診療所長 瀧 川 晃 一

名古屋市北区清水1-18-4 TEL 052(951)3331



天野産業株式会社

代表取締役 宮 本 政 雄

〒461
 名古屋市東区泉二丁目21-11
 ☎ (052)931-0101 (代表)

社団法人

岡崎市医師会公衆衛生センター

〒444 岡崎市竜美北2丁目6番地1
 電話 0564(52)1572(代表)

労働安全コンサルタント (労働大臣登録 化 第68号)
 労働衛生コンサルタント (労働大臣登録 工学 第56号)
 愛知県労働安全衛生相談員



有限会社 柏木コンサルタント

〒471 豊田市野見山町1丁目102番地7
 TEL (0565) 88-5488

労働大臣認可 KKC 財団法人 近畿健康管理センター

附属労働衛生研究所 附属健康開発センター
 附属予防歯科保健指導センター-KKCウエルネス倶楽部
 三重 〒514 津市神戸165 名古屋 〒460 名古屋市東区筒井3-27-17
 事業部 TEL 0592-25-7426(代) 事務所 AT3ビル5F TEL 052-933-1520

医療法人 愛知集団検診協会 愛知健診所

理事長 船 橋 達 郎

〒496 津島市藤里町2丁目3番地 ☎0567(26)7328

事業内容 受託臨床検査業務(内分泌・RI検査、血漿蛋白検査、生化学検査、ウイルス検査、免疫血清血液検査、細胞性免疫検査、細胞形態学検査等)



株式会社 エスアールエル
Communication for Health

本社：東京都新宿区西新宿2-4-1 新宿NSビル22階

社団法人 オリエンタル労働衛生協会

会 長 鈴 木 正 雄

〒464 名古屋市千種区今池一丁目8番4号 ☎052(732)2200

(財)岐阜県産業保健センター

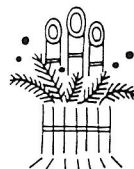
理事長 籠 橋 久 衛
 診療所長 加 藤 保 夫

〒507 多治見市東町1丁目9番地の3 TEL 0572-22-0115
 FAX 0572-25-0248

財団法人 公衆保健協会

「集団健診センター」

〒453 名古屋市市中村区二ツ橋町4-4
 電話 代表 (052)481-2161番



医療法人 **光生会病院**

豊橋市吾妻町137番地

社団法人 **瀬戸健康管理センター**

〒489 瀬戸市共栄通1の48
Tel 0561-82-6194

医療法人 東海産業医療団
**中央病院
健康管理センター**

〒476 東海市荒尾町丸根1番地
TEL (052) 604-2171 FAX (052) 603-5122

(財) **東海検診センター**

理事長 宮崎 勘治
診療所長 斎藤 俊二

〒410 沼津市新沢田町8番7号 ☎0559-22-1157

(医) **豊昌会
豊田健康管理クリニック**

理事長 加藤 昌平

〒473 豊田市竜神町新生155番地 TEL 0565 (27) 5550



医療法人 名翔会
名古屋セントラルクリニック

〒457 名古屋市南区城下町3丁目14番地
☎(052)821-0090(代) FAX(052)824-0655

社団法人 **半田市医師会健康管理センター
半田市医師会臨床検査センター**

〒475 半田市雁宿町1の54の8 TEL 0569-21-3410

平成薬品株式会社

名古屋市熱田区金山町一丁目7番8号
取締役社長 篠田 祐八郎

(財) **三河保健予防協会**

理事長 由利 卓也

〒442 豊川市大堀町77 TEL 05338-6-1515

(社福) **聖隷福祉事業団
聖隷健康診断センター**

所長 臼田 多佳夫

〒430 浜松市住吉2丁目11番20号 TEL 0534 (73) 5501

健診健康総合サービス

(財) **全日本労働福祉協会東海支部**

支部長 福島 忠良

〒457 名古屋市南区柵下町2-4 052 (822) 2525

中京サテライトクリニック

〒470-11 愛知県豊明市西川町島原6番地の7
TEL (0562) 93-8225 (代表)
予約センター (0562) 93-8222 (直通)

医療法人

東海労働衛生検診クリニック

名古屋市中村区藤江町2の60 松浦ビル2F
電話 052(482)5482番(代表)
FAX 052(482)1886

◀ **名古屋片山化学株式会社**

名古屋営業所 〒460 名古屋市中区丸の内3丁目11番4号
電話(052)971-6531番(代表) FAX(052)971-6540
名古屋営業所 〒458 名古屋市緑区野末町1-1-3 番地
電話(052)624-5821番(代表) FAX(052)624-5818
岡崎営業所 〒444-21 岡崎市大樹寺1丁目11番11号
電話(0564)21-4203番(代表) FAX(0564)21-4523
小牧営業所 〒485 小牧市大字入鹿出 新田字宮前1-1-0 7
電話(0568)73-2291番(代表) FAX(0568)73-6354
浜松営業所 〒432 浜松市富塚町3-8-57-2
電話(0534)72-5110番(代表) FAX(0534)72-5156

医療法人

日本生命ヘルスコンサルタント

所長 原 爽

〒450 名古屋市中村区名駅南1-27-2
日本生命笹島ビル6F
TEL (052) 582-0751

快適環境の創造

労働衛生コンサルタント 清水 武

作業環境測定機関登録静岡県22-6号

株式会社 富士電化環境センター

代表取締役常務 渡邊 昭

〒43104 静岡県湖西市鷺津600番地の2 ☎(053)576-1713

医療法人 **曙会 美合病院**

理事長 神取 武史

〒444 岡崎市美合町字平端24番地
TEL(0564)51-2521(代) FAX(0564)54-5851

YAGAMI

株式会社 八神製作所

本社

〒460 名古屋市中区千代田二丁目16番30号
TEL(052)251-6671(代) FAX(052)251-7726

謹
賀
新
年

平
成
四
年
元
日